

連載エッセイ  
essay

第3回

# 1年目の勤務を 終えた総括と 今後の展望



きほら さき  
木原 早紀

(一財)  
砂防・地すべり技術センター  
火山防災部 技師

入社してから1年間の総括として、今回の原稿作成をお願いされた際、私はいったい何を書けばいいのだろうと頭を悩ませてしまいました。どうして1年の総括を書くのが困難に感じたか、それは学生時代から社会人に移り変わるタイミングでコロナウイルスの感染拡大という特殊な条件が入ってしまい、1年前と環境があまりにも異なっていて、自身がどう成長したのか、あまり実感できていなかったからです。

私が入社した日から1週間後の4月8日、コロナウイルスの感染拡大に伴い、緊急事態宣言が発令されました。社会人になって間もなく、ただでさえ右も左もわからない上の非常事態に、私は翻弄されていました。過去の業務資料が参考にならないことも多かったですし、ろくに顔合わせの機会もなく、社内にどのような方がいらっしゃるのか全くわからないため、質問一つするのも一苦勞でした。緊急事態宣言が出てしばらくし、リモートワークも始まると、益々どのようにしたらいいのかかわからず、何度も遠回りして作業することもありました。特に初めての緊急事態宣言が出てまもなくのころは、感染経路や感染後の症状について詳しい情報がわからず、それでも臨機応変に対応していかないといけない状況にあり、現代社会に生きる人誰もが厳しい心身状態で過ごす日々がありました。だから私も、「1年目でただでさえ大変なのに…」と悲観的になることはありませんでしたが、やはり学生から社会人へと環境が激変する上にさらに重なった異常事態に柔軟に対応することは難しく、目の前のことをこなすだけで精いっぱいの状態でした。ようやく自分で仕事をし

ているなど実感できたのは8月も終わるころではなかったかと思います。その後もやはり、度重なる制限等により、慌ただしい日々が続き、この1年間、自身を振り返る余裕はあまりありませんでした。

「木原さんは焦りすぎではないだろうか」、私がこの1年間で一番よく言われた言葉です。焦りが続けばミスが出てきますから早急に対処しないといけないのですが、今でもなかなか焦りは拭えていません。例えば、砂防分野の専門知識や業務工程の知識の不十分さだとか、非常事態ばかりで通常の状態を知らないことが後々問題として出てくるのではないかとか、社会人の常識から外れた行為をしていないだろうかとか、古来から問題になってきた労働時間の改善に伴う経験量の減少分をどのように得たらよいのだろうかとか。社会人になってから自身を取り巻く抽象的な物差しは格段に増え、またそれは常に移り変わるものであります。だからこそ正解等なく、考え込みすぎるものでもないことは理解しています。しかし、自分がやるべきことを達成できているのか、自分はきちんと仕事をこなす次に進めているのか、そう思うと、絶えず不安になるばかりです。もともと心配症の自覚はありましたが、このコロナ禍でより多くの懸念事項が出てきてしまい、また、数々の自粛によって他人との対話も減少し、自分一人で考え込む時間も増えてしまったため、それがさらに加速してしまったように思います。

もちろんこのコロナウイルスの感染拡大による影響は非常に大きいものであり、ここまで環境が激変することはめったにあることではありませんが、劇的に時代、環境、業界の常識が変わっていくような大きなインパクトは今までも起こったことであり、今後も起こりうることです。砂防業界

は防災という変わらない目的があり、長い期間で考案する必要のあるものでありますが、それでも、計算手法や技術の革新、防災基準の変化、世論、新たな災害等によって今の常識はいつ塗り替えられてもおかしくないものです。また、変化があったからといって、新しい選択肢を即座に選び取ることがよいわけでもありません。例えば、このコロナ禍では多くの企業・公官庁でリモートワークが始まり、業界全体のデジタルインフラ整備がかなり進みました。企業によっては通勤時間や事務所面積の削減という利点もあることから、コロナ以後も完全にリモートワークに切り替えると方針を掲げているところもあります。この業界におきましても、リモートワークやWEB会議の推進によって、感染拡大の抑制だけでなく、出張や通勤といった時間的制約の削減という観点から、コロナ終息後もその選択肢が消えていくことはないでしょう。一方で、常に社内の人間と通話がつながっているような環境でなければ、リモートワークは個人の作業になりがちで、周囲の人間がどのように行動しているか把握することができません。社内の人間関係構築や仕事の習熟を進める前のリモートワークはなかなか安易なものではなく、対面だと無意識に行っていた環境構築を意識的に行うよう、十分なフォローを検討した上で、リモートワークやWEB会議を推進していく必要があると考えています。新しい選択肢が出てきても、今までどうして古い選択肢が“良し”とされていたか、どうして今それが“良し”とされないのか、本当に切り捨ててよいものなのか、立ち止まって検討しないとイケません。

最近になって、このコロナ禍の中で社会人生活をスタートさせなければならなかったことは、運が悪かった…と思うと同時に、少しだけ運がよ

かったと思うようになりました。社会人1年目の期間としてはなかなか大変でしたが、環境すべてがあまりにも変わると現場は、社会は、自分はこんなにも混乱してしまうのか、そしてその環境下であってもどうやって答えを見つけていくべきなのか、社会人生活の早い段階で経験することができました。私の心配症は、わからないことや判断基準がないことへの恐怖から出てくるものですから、今後知識を積み、見識を深めていけば、少しずつ不安を取り除いて仕事を行えるようになると思います。しかし、また今回のような環境や常識の激変を経験し、不安に苛まれることがあるでしょう。それでも、今の状況下を思い出せば、今までの経験に意固地にならず、かといって過去の蓄積を突き放してしまうわけでもなく、柔軟な取捨選択の思考を持つよう心がけた上で、自分なりの答えを導くようにしていけたらと思っています。

この原稿を書いている5月時点でも、まだコロナウイルスの影響は収束の気配を見せていません。緊急事態宣言が延長され、娯楽もまともに楽しめず、必要最低限の外出をすれば心身ともに疲れ果てた人をよく見かけるようになりました。これから果たしてコロナは完全に終息するのか、はたまたあと5年は同様の状況が続くのかわかりません。そして仕事が、業界がどのように変わっていくのか、私はそれに対応し続けていくことができるのか、そう思うと自信がなくなってしまい、また不安になります。しかし、ふと考えれば、そもそも建設コンサルタントの仕事だってわからないことばかりのものを開拓していく仕事なのですから、この仕事に携わる以上、何も動じ過ぎることはないのでしょうか。今後世界がどのように変わっていくのか、今とどんな違う考えになっているのか、不安と同時に楽しんでいきたいものです。

